

新修 豊田市史だより

第15号



阿弥陀如来坐像(阿弥陀堂 小原地区)

江戸時代の山村―山野の利用と「地之産物」―

『新修豊田市史7 資料編 近世I』の刊行

新修豊田市史編さん事業の一環として、平成二十六年三月に『新修豊田市史7 資料編 近世I』が刊行されました(以下、『資料編 近世I』と略記)。「資料編 近世I」は、豊田地域の藤岡・小原・旭・稲武地区における江戸時代に關する膨大な資料をもとに、「領主の支配」「土地と山野」「家と村」「災害」「産業」「社会」「寺院と神社」「文化」の八章にわたってテーマを設定して資料選定を行い、この地域の歴史像を提供することを目的としました。ただし、江戸時代の資料を読み解くのは容易なことではありません。そのため、収録した各資料の内容とその資料から読み取ることができるこの地域の特徴を紹介した「解説」にも相当数のページを割いてあります。「資料編 近世I」を手にとった方は、「解説」を参考にしつつ、資料からこの地域の江戸時代の歴史を考えていただければ幸いです。

ところで、今回の資料編を編集する上で私たちが重視した点のひとつが、藤岡・小原・旭・稲武地区において広大な面積を占める山野は、江戸時代にこの地域で生活する人びとにとっていかなる存在であったのかという点でした。以下では『資料編 近世I』に収録した資料を中心に、山と人びとの関係性についてその一端を見てみましょう。

山野の利用―田畑と付属の山林―

通常、田畑の売買証文には対象となる田畑の地字・石高・面積などが売却値段などとともに記されますが、この地域には田畑に「柴山」「山」「山林」といった山地が付属していることを示す売買証文も残されています。たとえば、宝暦十二年(一七六二)に稲武地区夏焼村の庄右衛門が村内の大畑上中祢にあ

る田地四枚を売却した証文には、この田地に付属する「柴山」として鍛冶ヶ根峠通りの一区画が書き上げられています(『資料編 近世I』資料番号69)。この「柴山」に関して、夏焼村と同じ稲武地区の川手村では、元治二年(慶応元年、一八六五)、村内の御林・秣場・百姓持山における船材や薪炭の原材料となる立木を書き上げた「御船材炭薪有無書上帳」(『資料編 近世I』資料番号308)のなかで次のよう述べています。

当村は山中にありながら百姓持林払底の始末は、田畑薄地につき肥し耕作拔群いたさず候ては諸作生い立ち申さずにつき、耕地最寄り柴山と唱え、老か年刈り取り休み、式か年目刈り取り申し候、相隔て候処は毎春焼き払い秣山に仕り候故木品御座無く(後略)

ここでは、百姓が所持する林に原材料となる立木が払底している理由として、川手村の田畑の地力が弱く、多量の肥料を施さないと作物が生育せず、そのため、耕地近くの百姓持林は柴山と称して隔年で肥料としての草を刈り取り、耕地から離れている百姓持林は毎年春に焼き払った上で秣山まゆまとして利用していることを指摘しています。

田畑の売買証文に記された付属する「柴山」「山」「山林」とは、この資料にある肥料としての草を供給する「耕地最寄」にある百姓持林、「相隔て候処」にある百姓持林と考えることができるのではないのでしょうか。田畑に付属する林について「田畑が脆弱であるため林という肥料源を付属させておく必要があったのだと考えられる」とあるように(『資料編 近世I』第二章第一節「解説」)、この地域に特徴的な土地利用のあり方を資料から確認することができ

山の恵みと「地之産物」―雑木の利用と稼ぎ―

ところで、先ほどの川手村の「御船材炭薪有無書上帳」では、各百姓の持林での立木について杉・檜・松などとともに炭や薪の原材料として雑木の本数が書き上げられています。これらの雑木について川手村は、「村方にては薪

楯多分^{ほた}伐り置き申さず候ては厳寒相凌ぎ難く「百姓薪に差し支え」ることなどを理由に、幕府による買い上げを「御用捨」されるようお願い出ています。ここでは、雑木はこの地域の人びとが厳しい冬を乗り切るために不可欠な自家消費用の薪の原材料であることが強調されています。しかしながら、百姓持林や領主が設定した御林などの雑木は、より積極的にこの地域の人びとによって活用されていました。

川手村とおなじ稲武地区の稲橋村は、信州飯田から足助・名古屋へと通じる飯田街道沿いに位置し、名倉川をはさんで武節町村に接する村です。慶応三年（一八六七）の「稲橋村運上冥加書上帳」（『資料編 近世Ⅰ』資料番号44）は、幕末期における稲橋村の農業以外の諸稼ぎと稼ぎに対する付加税である運上・冥加金の上納状況について書き上げた資料で、この資料から当時の稲橋村には酒や味噌といった醸造業や質屋業（稼ぎ人はいずれも土古橋源六郎）のほか、各種の商人・職人・輸送業者が在村していたことがわかります。

これらの諸稼ぎのなかに、鍛冶職人が使用する炭や紺屋職人が染料で使用する灰を焼き出す「鍛冶炭・紺屋灰焼」があります。注目すべきは他の稼ぎについては従事する稼ぎ人の名前が記されているのに対して、「鍛冶炭・紺屋灰焼」はその他の稼ぎをしている者たちや稼ぎをしていない者に限らず、農業の都合を考慮しながら村中一同が従事している点です。村の多くの人が雑木を活用して「鍛



田畑と付属の山林(旭地区上切町)

冶炭・紺屋灰」の焼き出しに従事していたのです。おそらくもともと炭や灰は自家消費用として各家で生産されていたのでしょうか。

つまり、本来は自家消費用であった炭や灰が、「稲橋村運上冥加書上帳」に書き上げられた商人の平左衛門・文治郎による「産物のたば粉・白木類その外を買い入れ、尾州名古屋・当国岡崎その外に売り払」う活動や、馬稼ぎの傳三郎・十左衛門・喜七による「産物の鍛冶炭・紺屋灰・たば粉その外を附け出す活動を通して外部の市場と結びつき、鍛冶炭・紺屋灰として商品化したのではないのでしょうか。このように、雑木という「山の恵み」を活用し、地域の産物（地之産物）を生み出す営みが、少なくとも近世後期にこの地域で展開していたことは間違いありません。

以上、『新修豊田市史7 資料編 近世Ⅰ』に収録した資料から、山と人びとの関係性についてその一端を見てきました。このほか、林業や山をめぐる争論などを通じて、さまざまな関係性を読み取ることができると思います。それらの点を含めて『新修豊田市史7 資料編 近世Ⅰ』に収録された資料から、山に囲まれたこの地域の人びとの歴史的営みを是非読み取っていただきたいと思えます。

（近世部会 執筆委員 篠宮雄二）

豊田市史仏像調査とその成果—調査ノートより—

豊田市の仏像調査は、平成十八年から『新修豊田市史21 別編 美術・工芸』の編集が開始される平成二十四年まで六年間におよびました。

調査は、予備調査と本調査の二段階で実施。予備調査では新たに豊田市と合併した旧六町村の地域を中心に新資料の発見に努めました。調査は時間的制約もあり、全ての社寺にはおよびませんでした。一五〇日にわたり各堂内の全仏像を写真に収め、像名と像高を記録しました。また、仏画等の軸物があればそれらも記録し、絵画班の調査に委ねました。

一方、昭和五十一年から『豊田市史』を刊行した折に市内二二の寺院等の調査台帳が作成されていきました。したがって、今回の調査と併せて五六七の寺院等(神社、辻堂、個人宅ふくむ)の台帳が備わったことになります。それらは豊田市が市内の仏像の全容を把握し、保存管理を進めていくうえで大いに役立つでしょう。



写真1 仏像調査風景

本調査は予備調査の資料の中から掲載を前提に専門家による写真撮影、法量の測定、形状や材質構造、銘文等の像内情報のほか像の造形的特徴も記録しました。

法量は各部の寸法のこと、像高、面長、面幅から像の幅や奥行など十数か所におよびます。これらは他像と比較検討する際に役立つはず。

形状は、頭髮や装身具、衣裳、顔や手の形(印相)、持物など細部の形におよび、これにより如来、菩薩、明王、天部などの種類や像名も特定できるわけです。

材質構造のうちの材質は市内ではほとんどが松など針葉樹系の木彫像で、その構造には一木造と寄木造があります。一木造は頭体の主要部がほぼ一本の木材できていますので、干割れ防止のため背面から縦長の穴をあけて内部を剝る(背剝)場合もあります。また、一木造ながら体部を前後に割り、内部を剝つたものを割短造(わりはざくり)といい、さらに首の付け根にノミを打ち込み、頭部を一旦割り離すものを割首(わりびし)といいます。

寄木造は頭体の主要部を前後、または左右二材以上の木材を束ねて造るもので、像内を大きく剝る(内剝(うちくくり))ことができます。これは平安時代、十一世紀中頃に完成した技法で、本来は干割れ対策として開発されたものですが、大材がなくても大像が造れることから大いに発展し、以後の盛んな造仏活動を支えました。また、節材効果もあることから小像にも用いられるようになりました。さらに、造形的な面でも利用され、たとえば眼の裏側に瞳を描いた水晶板を当て、生き生きとした表情を表す玉眼(たままなこ)の嵌入も可能になりました。

造形的特徴は制作年代の判定の重要な材料として必要となります。

以上の各項目について数例を選び具体的に紹介しましょう。

・法量(像高、髮際高、面長)から分かること

解説では、像高については頭頂以下の寸法を記しましたが、原則的には仏像の高さは頭髮の生え際以下の髮際高(はつさいこう)を一応の目安とします。

仏像の大きさには大きいものでは丈六(一六尺約四・八m)、坐像は半分の八尺二・四m)、その半分の半丈六があります。市内には江戸時代の像で一八六・〇cmという像もありますが、市史に採りあげたものでは平勝寺(足助地区)観音菩薩坐像の一七〇・〇cmが最大です。ともに丈六でも半丈六でもなく、これらがどのような基準で決められたかは分かりません。

中程度の像では六尺あるいは五尺(等身)や三尺があります。とくに鎌倉時代の快慶は三尺の阿弥陀如来の立像を多く造っており、全国的にもこの大きさの作例は多いのですが、市内の阿弥陀如来ではそれより小さいのが一般的です。

小像では一搵手半いっぢやくしゅはんというものが有ります。一搵手は片手を広げて親指から中指までの寸法で、八寸とされることから、一搵手半は一尺二寸(三六cm)となります。市内では髪髯高三六・二cmの心月院(足助地区)阿弥陀如来立像がこれに該当します。妙昌寺(松平地区)釈迦如来坐像は坐像で髪髯高一五・二cm、立像に換算しても一尺の小像です。もちろんこれ以下にも八寸、五寸、三寸といった小像も有ります。

面長は顔の長さですが、髪髯から顎までを測ります。平安時代に定朝が理想的な仏像を創出しますと、仏師の中には定朝作の仏像を計測して同じような仏像を造ろうとするものが現れ、やがて仏像各部の大きさが髪髯高を基準とする一定の比率として定められていきます。これが木割法ともいわれる割付けの法則で平安時代末頃から徐々に定式化が進みます。

法興寺(松平地区)阿弥陀如来立像は髪髯高七三・二cmに対し面長九・一cmで八分の一となります。八頭身ならぬ八面身というわけです。妙昌寺釈迦如来坐像も髪髯高一五・三cmに対し面長三・九cmで四分の一となり立像に換算すればやはり八面身になります。のち大量に仏像が造られるようになった江戸時代には多くの仏像が寸法通りに造られました。

・形状から分かること

形状はその像の像名を示すものではありませんが、まれに形状と像名が一致しない場合も有ります。



写真2 性源寺 阿弥陀如来立像

天徳寺(藤岡地区)聖観音菩薩坐像の像内に納められた胎内仏は寺では十一面観音と伝えられていますが、頭上に化仏を挿込むための穴がありません。しかも両手は脚上で重ね、親

指を突き合わせる釈迦如来の定印と同じ形です。この像は本来は宝冠を戴いた菩薩形の宝冠釈迦如来だった可能性が有ります。ただ、掌の中央に持物を固定したような小穴が有り、ここに五輪塔があったとすれば弥勒菩薩ということになります。現状では寺伝を尊重し伝十一面観音菩薩坐像としました。性源寺(高橋地区)阿弥陀如来立像(写真2)は両手の形が通例と逆で、左手を挙げ、右手を下げています。

これは釈迦と阿弥陀を並立させるいわゆる遣迎けんぎょう二尊の阿弥陀に多い形で、この像ももとは釈迦如来と一對をなしていたかもしれないと見られます。右手が覆肩衣ふげんえと呼ばれる袖状の布で覆われないのは同じ如来形である釈迦の衣に対し変化をつけようとしたのではないのでしょうか。

・材質構造から見えること

阿弥陀堂(小原地区)阿弥陀如来坐像(写真3)は、様式的には十一世紀前半頃の古様を示すとともに、構造も古式です。像底を見ると主材が両膝奥の一部をふくむ一材からなり、通例ではその前面は広い平面状で両脚材と接合されますが、この像では両膝奥が大きく後退し、腹部の下が台形状に突出しています。

これに似た構造は県内では海部郡大治町の自性院薬師如来坐像にみられます。自性院像では腹部の下は半円柱状をなしています。愛知県史編さん委員



写真3 阿弥陀堂 阿弥陀如来坐像 (上:正面 下:像底)

会文化財部会の伊東史朗氏によれば、これは「一本の丸太材を効果的に使って体部のまるみを出す」ためのもので、十世紀末～十一世紀初めにかけての仏像によく見られるということです(『愛知県史別編文化財3 彫刻』総論)。

阿弥陀堂像もこうした構造の流れを汲むもので、小像ながら重要な作例といえます(現在この像は保存上の問題から豊田市郷土資料館に寄託されています)。



写真4 向陽寺 阿弥陀如来坐像
(上：正面 下：像底)

向陽寺(藤岡地区)阿弥陀如来坐像(写真4)は市内唯一の鑄銅製の仏像として貴重です。鑄銅仏の造り方はまず、鉄心を立て、これに土を付けて中型とし、柔らかくした蠟を被せて細部を造形して原型とします。この全体を外型土で覆い、熱をかけて蠟を流し去り、その隙間に熔けた銅を流し込んで仕上げます。

この像には像内に鉄心と中型土の一部が残りますが、技法的に珍しいのは像底中央の前後に橋状に薄く銅が渡されていることです。その目的は鉄心を固定することにあるかもしれませんが、通例ではこのような仕口はなく、また必要とも思えません。さらにこれをどのようにして造り出したかも不明で、今後の検討に委ねるべき興味深い事例といえます。

以上、豊田市の仏像には注目に値するものもあり、市民共有の文化財として末永く保存されていくことが望まれます。

(美術・工芸部会 部会長 山崎隆之)

第十五回 市史講座 筆者とめぐる文化財ツアー

山崎隆之(美術・工芸部会長)
鷹巢 純(美術・工芸部会執筆協力員)
横川耕介(美術・工芸部会執筆協力員)

平成二十六年十月二十九日、第十五回市史講座「筆者とめぐる文化財ツアー」が開催されました。『新修豊田市史21 別編 美術・工芸』に掲載された文化財を執筆者とともに見学し、豊田市の文化をより一層理解していただくという企画で、三十三名の皆様にご参加いただきました。午前中に訪問した如意寺(石野地区)では、鷹巢純執筆協力員から同寺の「親鸞聖人絵伝」がパターン化する以前のもので、あちこちに珍しい場面が含まれていることなど興味深いお話がありました。



午後は清寿院(下山地区)を訪れ、山崎隆之部会長より『新修豊田市史21 別編 美術・工芸』に掲載されている阿陀如来坐像を中心に「説明いただきました。また、袈裟のまとい方の実演は大いに参加者の興味をひくものでした。最後にうかがった猿投神社・山中観音堂(猿投地区)では毘沙門天部立像と不動明王立像を拝観しました。

市の文化の魅力を書物だけで伝えるのはなかなか困難です。市史編さん室では『新修豊田市史』をより深く理解していただくために、今後も市史講座を開催していきます。

活動記録 (平成26年7月～12月)

7月

22日 自然部会水文矢並湿地地下水調査
美術・工芸部会典籍班打合せ

26日 近代部会資料調査(～27日、稲武)

自然部会(第29回)、中間報告会(第3回)

29日 美術・工芸部会典籍班(第1回)

8月

2日 自然部会水文河川調査

(～6日、仁王川・飯野川・巴川)

5日 現代部会資料調査(藤岡・小原)

8日 近世部会資料調査(岩瀬文庫)

12日 自然部会災害資料調査

(愛知県公文書館・愛知県図書館)

15日 近代部会資料調査(～16日、稲武)

19日 古代・中世部会資料編打合せ

自然部会気象ヒートアイランド調査

22日 近世部会資料調査(岩瀬文庫)

自然分野生物検討会(第24回)

24日 近世部会(第36回)

29日 近代部会(第24回)、資料調査(～30日)

原始部会、古代・中世部会合同資料調査

(墨書土器)

9月

3日 近世部会資料調査(～4日、滋賀県彦根市)

6日 専門委員会(第31回)、民俗部会(第19回)

7日 市史講座(第14回)

現代部会資料調査(愛知県図書館)

10日 自然部会ラムサール湿地植生調査

(～11日)、淡水魚類調査

11日 近代部会資料調査(～12日、東京大学史料編纂所・東京国立博物館)

12日 近世部会資料調査(岩瀬文庫)

14日 近世部会(第37回)

現代部会資料調査(愛知県図書館)

15日 原始部会(第35回)、考古Ⅱ打合せ

建築部会(第28回)

20日 古代・中世部会(第30回)

21日 民俗部会現地調査(挙母)

24日 近世部会資料調査(愛知学院大学)

25日 現代部会資料調査(愛知県公文書館)

美術・工芸部会典籍班打合せ

28日 現代部会(第27回)

30日 自然部会水文矢並湿地調査

10月

1日 民俗部会現地調査(高橋)

4日 自然部会(第30回)

18日 民俗部会現地調査(～19日、挙母)

20日 近世部会資料調査(愛知学院大学)

27日 現代部会資料調査(稲武)

28日 編さん委員会(第9回)

29日 市史講座(第15回)

11月

7日 古代・中世部会

近世部会資料調査(岩瀬文庫)

9日 市史講座(第16回)

10日 近世部会資料調査(愛知学院大学)

17日 美術・工芸部会資料調査(上郷)

19日 近代部会資料調査

(～20日、宮内公文書館・東京都公文書館)

19日 民俗部会写真撮影(～21日、高岡)

12月

9日 古代・中世部会資料調査(～10日、徳川

林政史研究所・東京大学史料編纂所ほか)

14日 原始部会考古Ⅲ打合せ

19日 自然部会水文矢並湿地調査

20日 第32回専門委員会

21日 原始部会(第36回)、考古Ⅱ打合せ

22日 原始部会考古Ⅱ写真撮影

近世部会資料調査(愛知学院大学)

26日 自然部会水文調査

●原始部会個別調査

●近世部会定例調査

●近代部会定例調査

●民俗部会聞き取り調査

●民俗部会民俗Ⅱ読合せ・編集会議

●建築部会調査(民家・寺院・近代建築)

●棟札調査(上郷・高岡)

19回

毎月

毎月

17回

16回

22回

13回

『新修豊田市史』刊行案内

平成二十七年六月に第四回配本として『資料編 考古Ⅱ』、『資料編 現代Ⅰ』、『別編 民俗Ⅱ』の販売を開始します。フルカラーの『新修豊田市史』をぜひ一度お手にとってご覧ください。

●購入予約について

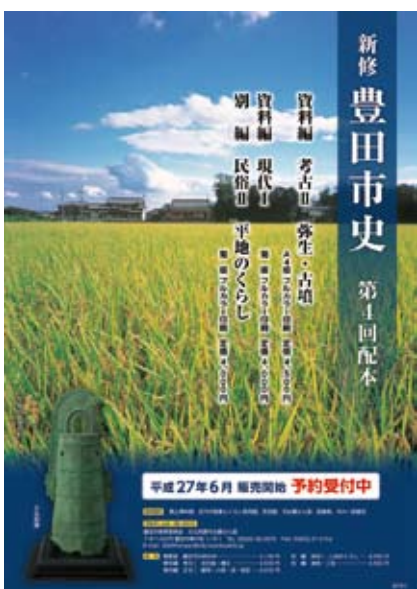
二月十八日から六月一日まで予約を承ります。市役所・支所などにある刊行案内リーフレットの申込書をお送りいただくか、市史編さん室宛にFAX・メールなどでお申し込みください。

●直接購入について

六月以降に左記の施設にて販売します。詳しくは『広報とよた』、市史編さん室ホームページなどでご確認ください。

【販売施設】

市史編さん室(陣中町) / 郷土資料館(陣中町) / 民芸館(平戸橋町) / 近代の産業とくらし発見館(喜多町) / 中央図書館(西町) / 市内一部書店



資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳

A4判 販売価格：四五〇〇円

第一章 総論 第二章 主要遺跡解説

第三章 主要古墳解説 第四章 集成・特論

資料編 現代Ⅰ

菊判 販売価格：四〇〇〇円

第一章 拡大する市域と人口

第二章 平地農村の都市化と都市農業の展開

第三章 山間地域における第一次産業の展開

第四章 世界に伸びる工業

第五章 商業・サービス業の展開

別編 民俗Ⅱ 平地のくらし

菊判 販売価格：四〇〇〇円

第一章 総論 第二章 生業

第三章 衣生活 第四章 食生活

第五章 住生活 第六章 社会生活

第七章 人の一生 第八章 年中行事

第九章 信仰

●好評発売中

新修豊田市史概要版『豊田市のあゆみ』

B5判 販売価格：二一〇〇円

資料編 考古Ⅰ 旧石器・縄文

別編 美術・工芸

A4判 販売価格：四五〇〇円

資料編 近世Ⅰ 藤岡・小原・旭・稲武

別編 民俗Ⅰ 山地のくらし

菊判 販売価格：四〇〇〇円

市史講座を開催しました

今年度の市史講座を次の通り開催しました。

第十四回 九月七日(日) 豊田市中央図書館

「江戸時代の山村と百姓のイエ」

篠宮雄二 / 近世部会執筆委員

「猿投神社の仏像―廃仏毀釈をこえて」

山崎隆之 / 美術・工芸部会長

第十五回 十月二十九日(水)

如意寺・清寿院・猿投神社・山中観音堂

「筆者とめぐる文化財ツアー」

山崎隆之 / 美術・工芸部会長

鷹巣 純 / 美術・工芸部会執筆協力員

横川耕介 / 美術・工芸部会執筆協力員

第十六回 十一月九日(日) 藤岡交流館

「金剛寺の『筆子名人入頂相』について」

長屋隆幸 / 近世部会執筆委員

「近世の在家・出家と朝廷文書の所持」

斎藤夏来 / 近世部会執筆委員

『新修豊田市史だより』第15号

平成二十七年二月発行

豊田市教育委員会

文化財課 市史編さん室

〒四七一〇〇七九 豊田市陣中町一―九一

TEL 〇五六五―三六―〇五七〇

FAX 〇五六五―三一―〇一六一

E-Mail: shishihensan@city.toyota.aichi.jp